

## 編 集 後 記

世の中が急速に電子化されてきて久しい。医者の世界でもオーダリングからフィルムレス、電子カルテと診療も電子化が進んできている。日本消化器外科学会でも今年度の学会の抄録集が電子化された。さらには本学会誌自体も2011年より医学系和文誌としては本邦初となる電子媒体のみとなり冊子自体がなくなるという。本学会誌の投稿も電子化され格段に投稿しやすくなったと思う。論文執筆についても文献検索が容易になり、一瞬で過去の情報が得られるようになった。20年前の検索の状況とは比較にならないが、その情報の質はさまざまである。良くも悪しくも情報の過多の時代である。

雑誌自体も電子化され図書室にも冊子自体がなくなり検食用コンピューターとプリンターが置いてある時代となり、“up to date”な情報が瞬時に得られるようになってきた。空いた時間をみつけて図書室で雑誌をパラパラめくり自分の興味がある内容に出会ったり、あるいは自分の専門領域以外でも知人や他施設からの報告に刺激されたりしたのも過去のこととなってしまった。このような情報もコンピューターを通して入手するという発想に転換しなければ流れから取り残されてしまう。

どんどん電子化され効率的に論文作成や投稿ができるのは大いに結構である。しかし、得られる情報は時間が経つにつれどんどん増える。良質の情報を選択し、さらには発信しなくてはならない、“質の時代”になったともいえる。電子化の恩恵を享受し多くの情報を吟味し新たな知見として発表して欲しいものである。検索や投稿自体の労力が以前に比べ少なく済み、時間がかからなくなった分、過去の文献の内容を十分検討し発表の論旨を展開していただきたい。

一方では、本学会誌の編集委員会は毎月委員が一堂に会し、顔を突き合わせて論議し、かなり“アナログ”に投稿論文の質の向上を図っている。電子化の時代においてはこのような“アナログ”の会議の意義は逆に大きいように思われる。日本消化器外科学会雑誌の電子媒体化に際し、電子化と“アナログ”で本学会誌が電子化の時代をリードする学会誌となることを切望する。

(橋本雅司)